

2022' 8 DancersWeb

トップインタビュー Vol.85



加治屋百合子 / ヒューストン・バレエ プリンシパル

「舞台マジックを起こしたい」

若干10歳で中国の上海舞踊学校に留学し、カナダ国立バレエ学校、アメリカン・バレエ・シアター（ABT）のソリストとして活躍したのち、ヒューストン・バレエ団に移籍しプリンシパルとして輝く光を放つバレリーナの加治屋百合子。舞台以外にも、2020年に日本のアーティストたちへの支援プロジェクト〈Hearts for Artists〉を立ち上げ、全額寄付する活動を行う。初のヒューストン・バレエ団来日公演に賭ける思いや、これまでのバレエライフについて丁寧に真摯に語ってくれた。

「舞台マジックを起こしたい」

2022' Aug Vol.85

Dancers Web トップインタビュー



— 2014 年に入団して約 8 年になりますが、どんなところにヒューストン・バレエ団の魅力を感じていますか？

ABT(アメリカン・バレエ・シアター)からヒューストン・バレエ団に移籍した理由の一つに、レパートリーの豊富さもありました。そして、施設が整っている点も魅力的です。団員全員がスタジオに入ってもまったく狭く感じないぐらいの広さで、全幕バレエもできる。しかも、そのスタジオがひとつではなく、いくつもあります。

広さ以外にも利便性があり、劇場がスタジオの真横にあるので舞台美術などのセットがスタジオの真横で搬入できる。このような施設が整ったバレエ団もそう多くないと思うので、素晴らしい環境で踊らせてもらっています。

— これまでのインタビューでも、イリーナ・コルパコワさん(ABT のバレエ・ミストレス)を一番の恩師と敬愛されていらっしゃいます。イリーナさんからかけられた言葉の中で、一番印象に残っているのは何ですか？

「人生を楽しみになさい」ですね。彼女がよく言っていたのが、「ユリコがハッピーなら私もハッピー。バレエだけでなく、プライベートもハッピーでないといけないわよ。その後の人生もあるんだからね」と。

彼女は今年 89 歳になりますが、たとえ休日でも、私のリハーサル動画を見てアドバイスをくれたり、イリーナさんこそバレエ漬けの毎日なのに、まさか、その彼女から言われるなんて思いませんでした！(笑)

— バレリーナとして現役 20 年、ダンサーを辞めたいと思うような精神的に苦しい時期を経験されたことはありますか？

やはりどのダンサーも長い間踊っていると、リハーサルが上手くいなくて悩んだり、役がなかなか付かなくて落ちこんだり、色々壁にぶつかる場面はたくさんあると思うんです。それでも私は、ダンサーをやめようと思ったことはありませんでした。

ただ一度だけ、そろそろ引退の時期なのかなと考えたことはありました。コロナウィルスが広がってきた年、同年代のダンサーが舞台を降りたことがあって、自分もそういう時期が来たのかなと。

そんな時期、バレエ団で 2 年前に踊った『ジゼル』と『眠れる森の美女』の全幕を踊る機会があったんです。そのとき自分でもビックリしたのですが、「2 年前に踊ったときより、また違うレベルで踊れた！」という確信が持てたんです。ダンサーとしてまだ成長しているから、まだ引退の時期ではない。そこで、もっと高めていきたいという気持ちが自然に沸いてきました。

— バレエダンサーとして、一番大切にしていることは何ですか？

やはり気持ちが伝わらないといけない。「良かった」以上に、舞台の世界に入るために観に来ていただいているので、感動を胸に劇場を後にしてもらいたいです。次に進む勇気とか、そういう前向きになれるような舞台を届けたいと思っています。

舞台上で起こっていることが客席と一体化するように、劇場全体が舞台であるような、心に通じる公演にしたいですね。

— 客席と一体化できた舞台で、特に印象に残っている公演はありますか？

ABT 時代に、スペインツアーで『ドン・キホーテ』を踊ったのですが、本場のスペインで『ドンキ』を持っていくのは勇気がいることだと思います(笑)。まず幕が開いたとき冷たい空気が漂っていて、「今日のお客さんは私の味方ではないのかな」と感じました。でも、幕が進むごとにあたたかい空気になって、だんだんと舞台と客席が一体化してゆくのを肌で感じることができました。

そうしてもう一つは、韓国で『ジゼル』を踊ったとき。幕が開いたときは冷たい空気が感じられました。『ジゼル』は観客に視線を送ることはないですし、ダンサーが『ジゼル』の世界観をつくらなければならない。そういう緊張感の中でしたが、カーテンコールではとても大きなあたたかい拍手をいただき感無量でした。

— そしていよいよ、ヒューストン・バレエ団の記念すべき初来日公演になりますね！

じつは、何年も前から決まっていた企画だったんです。それが実現する直前にコロナウィルスで何回か延期し、それがやっと実現します。ヒューストン・バレエ団は当初から、来日公演がバレエ団の一つの夢でもありました。なので、本当に万感の思いです。

— 来日公演で、『白鳥の湖』に主演すると聞いて、当初はどう思われましたか？

『白鳥の湖』は大作なので、ダンサーの負担も大きい。セットから何から他の演目とは規模が違いますし、踊る量も倍ぐらい増えるので、今から身体を整えないといけないなど、プレッシャーと喜びの気持ちが入り混じった感じでした。

— ヒューストン・バレエ団で、はじめて「白鳥」を踊ったときの印象はどうでしたか？

じつはそれまで、私に「白鳥」は向いてないと思っていました。でもリハーサルを重ねるごとに、団員や周囲の人たちが「ユリコは白鳥が合うよね」と言葉をかけてくれました。

そう言ってもらえたのは、たぶん、役になりきっていたからだと思います。「信じ込ませた」というのはちょっとおかしい表現かもしれませんが、そのぐらい自分自身がその役に身を捧げたというのでしょうか。とってもチャレンジングな役でした。

— スタントン・ウェルチ芸術監督版の振付・演出は、どのような違いがあるのでしょうか？

『白鳥の湖』は、まずオデットが白鳥として登場します。そして王子に出会って対話が始まる。でもスタントン版は、オデットがひとりの人間の女性として登場し、対話が始まる。そして、人間の恋人同士として愛を誓うんです。

多くのバージョンは、白鳥にさせられた女性という悲劇からはじまる、少しクールで悲しみの表現が全面に出ていると思いますが、スタントン版は人間味があって、感情が豊かでドラマチックに描かれています。私は演技するのが好きで得意としているので、とても役に入りやすいです。

— ほかに、スタントン版の面白さはどんなところにあると思いますか？

じつは、人間の女性としての登場は最初のシーンだけではないんです。
2幕以降も、人間の女性からオデット、オデットから人間の女性など、結構入れ替わりがありますので早替えも大変(笑)。

この演出はスタントン版だけなので、他のダンサーが踊っていると思われる方がいらっしやるかもしれませんが、全部私です(笑)。まさに、人間の女性とオデットとオディールの3役になります。

そして、もう一つの見どころは、第一幕の男性の群舞！
『白鳥に湖』といえばやはり、白い白鳥の美しい場面が印象的だと思いますが、男性の群舞にもぜひ注目してほしいです。狩りに行く場面では、ジャンプや回転など躍動感があって迫力あるシーンになっています。女性の群舞との対比が際だって面白いと思います。

— バレエダンサーから、ダンスパートナーによっても踊りは変わるとよく伺いますが、加治屋さんはどうですか？

年下のダンスパートナーと組むときは、相手の方がたぶん緊張していると思います(笑)。階級が違うときは特にそうかもしれません。その緊張感が伝わってくるので、私の方から積極的に話しかけます。

本番中の舞台上、「いま、良かったよ」とか言葉をかけます。はい、本番中です！ そうすると相手の緊張がほぐれてくるのが分かるんです。パ・ド・ドウの間、結構声を掛けています(笑)。

— 来日公演では、コナー・ウォルシュさんが王子役で組まれますが、彼とのパートナーリングはいかがですか？

逆にコナーとは、本番中に話すことはまったくないんです(笑)。というより、話していないことにあるとき気づきました。

目ですべて相手に気持ちが伝わる感覚というのか、組んだ当初からとても安心感があって、「この人は本番中に何があっても信頼できる」といった確信のようなものが自然に湧き上がってきたのを覚えています。

たとえば、ピルエットがずれて少し斜めの角度になってしまっても、そのまま安心して加速できる(笑)。そういうとき、コナーは斜めのまま支えてくれて、ピルエットが終わったときまっすぐ戻してくれます。

滑って振付がふっ飛んでしまったときやミスしてしまっても、お互い顔を見て、クスッと笑いながら自然に振りに戻ることができる。

本当は、私の身長はコナーとのバランスがあまり良くないはずなのですが、そういう身重差はまったく感じません。お互いが信頼できて身を任せられる。

だから舞台上でも自然に感情をぶつけられる。コナーは相手の女性のことをよく考えてくれていますし、心が広い。私のベスト・ダンスパートナーの一人です。

— コナーさんと、ヒューストン・バレエの『白鳥の湖』ではじめて共演されたのはいつですか？

それが、今回の日本公演が初になるんです！
コナーとは『蝶々夫人』『くるみ割り人形』『眠れる森の美女』『ジゼル』など色々な演目を踊っているのに、なぜか『白鳥の湖』だけは踊ったことがありませんでした。
なので、この来日公演は本当に楽しみにしています。

— 今後目標としていることはありますか？

もっと踊りたいです。レベルアップするチャンスはどの演目にもあるので、日々自分を高めていって舞台マジックを起こしたい。

— 最後に、初来日公演に賭ける思いをお聞かせください。

「今から頑張らなきゃ！」という思いです。
自分の所属するバレエ団で全幕を日本で踊れるという喜びはやはり大きい。
来日公演はヒューストン・バレエ団の一つの大きな夢でしたので、意気込みもすごいです！たくさんの方に観に来ていただけると嬉しいです。

ヒューストン・バレエ『白鳥の湖』

2022年10月29日(土)、30日(日)東京文化会館 大ホール

<https://www.koransha.com/ballet/houston/>

【加治屋百合子／ヒューストン・バレエ プリンシパル】

8歳でバレエを始め、10歳で上海舞踊学校入学、奨学金を得て首席で卒業。在学中の2000年、若手バレエダンサーの登竜門であるローザンヌ国際バレエ・コンクールでローザンヌ賞を受

賞。奨学金を得てカナダ国立バレエ学校入学。翌年アメリカン・バレエ・シアター（ABT）スタジオカンパニー入団。同バレエ団の研究生を経て正団員となり 2007 年ソリストに昇格。2014 年ヒューストン・バレエ団に移籍後、プリンシパルに昇格。海外のバレエ団、ガラ公演にゲスト出演のほか、マスタークラスや講習会など後進の指導にも力を入れている。2020 年に日本人アーティストを支援する【Hearts for Artists】を立ち上げ、その活動と国際的なキャリアが評価され、2021 年(第 71 回)芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。